

2. 学科横断的學生サポーター養成プログラムの開発と充実に向けて

所 属 人間文化学部 心理学科

職 名 准教授 氏 名 山崎 理央

<成果の概要>

人間文化学部では2015年度より、学生がコミュニケーション力や人間関係のスキルといった社会人基礎力を身につける活動の一環として、3学科間の横断的なプログラムとして「学生サポーター養成講座」を設けた。心理学科が学科開設当初より初年次教育の一環として教員主導で行ってきたピア・サポート訓練や、それを発展させた「ピア・サポート・トレーナー養成講座」をもとに、学科横断的なプログラムに発展させるための取り組みとしてスタートし、2年目の今年度はそのプログラムの開発と充実に向けて引き続き取り組んできた。

【活動メンバーについて】

メンバーは3学科の学生（基本的には3年生以上だが、下級生も参加可能とした）から自主的な参加者を募り、トレーナー養成のための一年間の活動とした。今年度の参加者の内訳は、1年目のジュニアが24名、2年目のシニアが6名、さらに3年目以上でサブとして加わった2名の計32名であった。学科別では、心理学科が19名、人間文化学科が7名、メディア・映像学科が6名であった。今年度は心理学科だけでなく人間文化およびメディア・映像の学生も一年間継続して活動し、3学科横断という体制の足場ができた。上記のジュニアおよびシニアサポーターには、年度末にあたって学部長名で養成講座終了の認定証が授与された。

教員は各学科から顧問として参加（心理学科は山崎准教授、人間文化学科は脇講師、メディア・映像学科は内垣戸准教授）し、養成講座のプログラムを立案、学部全体として教育の質を向上させることを企図し、教員の主導で学生を直接指導するあり方とは異なる角度から、学生の主体的な活動をサポートした。

【活動の内容について】

メンバーは養成講座のプログラムとして以下の活動に参加した。

① 新入生オリエンテーション合宿

上級生リーダーとして参加し、新入生の仲間づくりの研修をファシリテートした。

② 学部共通行事（留学生交流会）

留学生および日本人学生の交流促進のために、行事内容の企画運営に学生の立場から参加し役割を担った。

③ 新入生に対する履修指導や生活相談

年度はじめの新入生サポートや、学修支援の機会提供の対応を担った。

④ピア・サポート訓練の出前授業

地域の高校からの要請に応じて研修を実施した。内容に関する高校教員との事前の打ち合わせ、研修当日の進行も担当した⑤海外の大学から短期研修生等が来学した際に、学内および学外研修に同行して研修をサポートし、学生間の交流をはかることも予定していた(今年度は実際には来学がなかったため実施せず)。

以上は特に、3学科合同で学部単位として活動したものであった。一部はもともとは心理学科単独で行っていたものもあるが、それらに他の2学科のメンバーも加わって一緒に活動したのは新しい取り組みであった。

プログラムでは、さらに以下の各学科の活動も(いずれも教員との連携のもと、学生主体での企画運営により)行われた。

⑥心理学科：教養ゼミのピア・サポート訓練でのファシリテーション

⑦人間文化学科：人間文化フェスタでの運営サポート

⑧メディア・映像学科：映像制作への取り組み

学科別の活動に関しては、心理学科はジュニア・シニア間の先輩後輩の協力関係がよりしっかりしたものに進んできたと思われる。人間文化およびメディア・映像学科についても、今回のメンバーが一年間のプログラムを継続し、学科を越えたメンバー間の交流・協力関係を経験したことは、それぞれの学科内における学生同士のサポート意識の醸成に良い影響をもたらし、先輩・後輩同士の協力関係が今後育ってくることが期待しうるものであった。

【活動の成果】

学科それぞれのメンバーの育成、および学科に応じた活動内容の拡充を今年度の重点課題としたが、プログラム実施の継続やメンバーの育成については、ある程度の手応えが得られたと考えられる。一方、取り組みにあたって各学科の特色をより活かした形でプログラムの充実を図ることについては、まず3学科の横断的な活動の土台を築いたことは成果であった。しかし、それをより強固なものとして定着させるためには、学生がスムーズに活動に取り組めるよう、また学生がより主体的に活動する力を伸ばせるよう、引き続き教員が後方支援し配慮を怠らないことが重要と考えられる。

新年度のメンバーについても自主的な参加を募ったところ、3学科で今年度並みの32名の申し出があり、うち15名は2年目のシニアである。他者をサポートする活動への関心・意欲のある学生が育っていること、その活動に継続して関わることを希望する学生が増えている点も成果として考えられる。3年目となる新年度は、3学科間の協力関係をより向上・定着させるべく引き続き取り組んでいきたい。